

第4号



○令和4年度
第4回理事研修会
【Web開催】

発行
北海道小学校長会
札幌市中央区北5条西6丁目
第二北海道通信ビル306号室
TEL 011-218-9850
FAX 011-218-9851
e-mail: h.s.k-32@dousho.jp
https://www.dousho.jp/

令和4年度 第4回理事研修会

☆令和4年12月16日(金)10時30分より
☆Web開催

【報告事項】

- 全連小第242回理事会報告
- 教育情報について
- 会務・各部の活動について
- 第65回
道小教育研究旭川大会について
- 第65回
道小教育研究旭川大会研究のまとめ
- 第74回全連小島根大会について
- 令和5年度以降の研究関連分担
- 道教委・教育局への要望内容の集約について
- 北海道へき地・複式教育研究連盟(へき・複連)の活動や要望について
- 北海道特別支援学級設置学校長協会(道特協)の活動や要望について
- 令和4年度第1回運営委員研修会(中間監査報告)について
- 企画研修委員会中間報告について
- 全連小対策・調担当連絡協議会報告について

【道教委 行政説明】

- 新たな研究制度における「研修受講履歴を活用した対話に基づく受講奨励の仕組み」について
- 定年引上げの今後の予定について
- 部活動地域移行について
- 性的マイノリティに係る職場研修について
- 北海道幼児教育振興基本計画について
- オンライン学習について
- 新型コロナウイルス感染症の対応について
- いじめの対応について
- ヤングケアラーの支援について

【協議事項】

- 道小大会運営研修(反省会・引継会)を受けて
 - ① 道小大会運営研修会(反省会・引継会)の報告
 - ② 第65回道小旭川大会を振り返って(理事より感想意見)
- 第66回道小渡島・北斗大会について
- 道小渡島・北斗大会及び第75回全連小東京大会の参加割当等
- 次年度活動計画・総会宣言文の作成について
- 次年度役員選考について
- 活動計画作成委員・基金管理運営委員 委嘱

【連絡】

- 第5回理事研修会について
- 次年度諸会議年間計画(案)
- 退職会員の感謝状と記念品について
- 次年度全道会長研修会の話題集約について

1 開会の言葉 …………… 山村 健史 副会長



第4回理事研の開会にあたり一言挨拶を申し上げます。各校では年度末評価を進めることと並行し、新年度方針の作成に力を注がれている頃と思う。私たちは校長として自分の学校経営がどうであったか、子どもの姿で評価して、次年度はどうやったら自校の子どもたちが生き生きと過ごし自分を成長させていけるのか、どうやったら自校の教職員が安心して業務にあたりチームとして結束して子どもたちを成長させていけるのか、どうしたら保護者や地域の皆様が学校の教育活動を理解して協力いただけるのか、頭を悩ませている。

さて、本会会則第2条には、本会の目的として小学校長の職能向上と本道教育の振興をはかること、

と明記されている。職能向上の最大の機会となるのが、道小研究大会であり、全連小研究大会である。今回の理事研は研究大会の総括と今後の方向性について確認する重要な機会である。また来年度の活動計画の作成にあたり今年度の会務の状況を振り返る機会となっている。

第4回理事研はリモート開催ということになったが、各地区理事の皆様もこの形式の開催には慣れてきているので真摯な議論を深めていくには支障がないものと思う。本日の会議が充実したものとなるようお願い申し上げます。

2 会長挨拶(要旨)…………… 紺野 高裕 会長



皆様、ご多忙の折に参加いただいたことに感謝申し上げます。コロナ第8波もようやくピークを過ぎてきたが、この間、多くの学校において学級閉鎖、行事の日程やもち方の変更など、大変な対応をされてきたことと思う。冬休みまであと僅かとなったが、2学期を乗り切り平穏な新年が迎えられるよう願っている。

さて、本日は中間監査報告のために監査委員長の北島校長先生に参加していただいた。また、渡島地区理事の西田校長先生には、今回から研究指名理事も兼任していただくことになったので併せてお伝えする。

続いて、資料3-2をご覧いただきたい。来年度の全連小75周年記念誌の発刊に向け、全連小より学校備え付けの図書として購入を依頼されている。そこで、各校の校長室に置くことから、道小では個人負担とならぬよう、道小特別会計の道小基金で購入してはどうかと考えている。基金管理運営委員会を立ち上げて検討いただきたいと考えているので、了承願いたい。

1頁の資料1は第8回常任理事会での大字会長の資料である。「令和の教育人材確保に関する特命委員会」を自由民主党が立ち上げ、教員免許更新制を廃止した文科大臣である萩生田政調会長が委員長となり検討を始めた。教師がやりがいをもって働くことができる環境の整備ということで、給特法の見直しや処遇改善、働き方改革、少人数学級や専科指導などの勤務環境整備が狙上に載せられている。また、教職の魅力を高め、志ある優れた人材が教師を目指すための支援ということで、学生への育成支援なども取り上げている。大字会長は、全連小で要望していたことの推移を見守りたいとのことであった。

次は2頁の不登校について。先日の問題行動等調査の結果から、不登校児童生徒が過去最高になり、小学校での出現率も昨年の1.0から1.3に上昇している。文科省の児童生徒課の分析として、4点が挙げられている。また、先日、生徒指導提要のデジタル版が配布された。4頁に資料を載せたので、校内研修を実施するなどして、生徒指導提要を参考に不登校対策に当たってほしいとのことである。関連して、オンライン授業を出席扱いにするかどうかの議論もあり、大字会長は、人と直接会い共通の経験をすることが重要であると述べていた。

今後の予定として教員採用試験の在り方に関する協議会があり、全連小もヒアリングを受ける。小学校では、全国的に教師不足が深刻であり、採用試験の早期化が必要と考えている。これまでの協議では、大学側は学生の負担増など教育実習の前倒しに否定的である。都道府県教委も採用試験の方法変更は業務負担増となり問題作成も大変であるとして、否定的な意見が多いそうだが、小学校の窮状について、再度声を大に訴えてくるとのことである。

国の動向について。令和4年度補正予算が出された。研修体制整備25億円、GIGAスクール95億円等の予算がつくこととなった。3頁は東京都の教員採用選考の結果である。小学校の倍率が1.4倍と危機

的な状況で、特に、受験者数の減少が顕著で、緊急かつ有効な対策を講じる必要性について、危機感をもって文科省に要望していくとのことである。

5頁には関係省庁の「いじめ防止対策に関する関係府省連絡会議」の資料を載せた。年末年始に対応すべきこと、年明けに検討することなどが出されているのでご覧いただきたい。

6頁の資料2は、次回全連小理事会の予定である。資料3は来年度の全連小の予定である。

9頁からの資料4は広報部の資料である。来年度の小学校時報や教育研究シリーズの内容について了承された。11頁を見ると、北海道が教育研究シリーズの提言に当たっている。

13頁の資料5は、東京大会に関わる各種報告等である。18頁の資料6は島根大会の総括である。オンライン・オンデマンド配信は概ね好評とのことだ。19頁をみると、4,294名の参加があり、うち3,978名がオンデマンド配信を視聴している。

20頁からの資料7は、令和6年度全連小徳島大会の要項案である。10月24日、25日徳島市で開催する。徳島の実行委員会から参加費を8,000円から10,000円に値上げしたいと打診があった。私も意見を求められ、2,000円もの値上げは理解を得られない、オンライン視聴する方から多少の費用を徴収するなど別の方法があるのではと述べてきた。会議においても、負担金は値上げしたばかりであり、再度予算を見直し、現状維持(8,000円)かせめてオンライン費用徴収などを工夫すべきとの声が圧倒的であった。

これに関連して23頁の資料8より、今後の全連小大会について。函館大会、秋田大会までは2,400人規模で実施していた。現在2,200人規模で予算を立てているが、全国的な学校数減少を考え見直す必要が出てきた。しかし、参加者が減ると収入も減るため、全連小からの補助金も含めて今後更に検討を重ねていくとのことである。

27頁の資料9は、小中一貫校・義務教育学校の負担金についてである。義務教育学校の増加に伴い、負担金について全日中と協議し、半額ずつにすることになるそうである。

最後に28頁の資料10について。12月9日に常任理事会で手分けをし、文教関係の衆参国議員に手交した要望書の件である。義務教育国庫負担率2分の1の実現、教師不足解消や処遇改善、学校における働き方改革を実現するため次期指導要領を見越した指導内容・指導時数の削減など、学校現場に必要な要望となっている。情報は以上となる。

3 議長選出 ……………手塚 敏 副会長



4 報 告

(1) 全連小第242回理事会の報告

…… 池田 克己 副会長



大字会長の挨拶の中で、教員採用選考については倍率が危機的状況にあること、その対策として選考日程の早期化について文部科学省へ呼びかけていること、教育実習の早期化についても考えていることなどが説明された。私たち校長が教職員を大事にし、元気に働いてもらうことが、10年後20年後のよい教師を育てることになり、持続可能な教育につながるということが伝えられ、挨拶が締めくくられた。

会務や会計報告の後、今年度の島根大会開催までの経緯と、次年度の東京大会についての説明があった。東京大会については、フルサイズの参加人数として開催予定であり、国や東京都からの行動制限が出されない限り、参集して開催する予定であることが説明された。

7月に行われた要望活動の内容については、教職員の確保として、新規採用選考の開催時期を前年度の秋頃や通年などに変更して見直しを図ること、奨学金返金の優遇措置のこと、高等学校に教職コースを設置検討することなどについて説明があった。

子どもと向き合う時間の確保については、基礎定数の改善と共に、教師一人当たりの持ち授業時数の考え方の導入の件などが説明された。また、全連小75周年記念事業については、記念誌の発行を予定しているので、各校長室に置く体制としてほしい旨が伝えられた。

震災等災害被災県からの報告もあり、今回は岩手県より説明があった。情報交換の場では「校長の研修について」をテーマとし、各都道府県の理事でグループをつくり協議が行われた。他地域の状況を知ることができ、よい情報交換の場となった。

(2) 教育情報について…… 森田 智也 事務局長



4頁、記事番号2-2「教員の変形労働時間制、4市町止まり」という記事について。以前は導入されるということで話題になったが、すっかり下火になっている感がある話題である。札幌市は記事にあるとおり、導入への動きは今のところない。北海道としては条例制定を済ませたという状況である。

取組内容としては、夏季休業中の閉庁日に年休ではなく、この制度を利用して捻出した休暇を充てるなどがある。職員がばらばらに制度を利用すると管理が煩雑になるため、運動会などの行事の日を選び、全教員の所定労働時間を一律に延長した取組もある

と記事は伝えている。

導入を巡っては、制度を使うかどうかは教員がそれぞれ判断するのだが、前年度の時間外労働が年間360時間以下でなければ使用することができない上に、適用後は年間320時間に抑えることが条件となっている。

3頁、6頁、13頁は部活動の地域移行についての記事が多く記載されている。13頁、記事番号5-2「道内部活動地域移行の検討状況 約6割の市町村検討着手」より紹介する。記事では、北見、留萌、伊達、音更を例に挙げ、協議の様子、課題の洗い出しなどの取組が紹介されている。倉本教育長は、「全ての市町村が地域移行を進められるように取り組んでいく。」と語っている。

小学校は部活動と関係がないなどと思わないでいただきたい。義務教育学校が増えれば、前期課程の教諭も部活動の指導を求められる可能性がある。道小はこれらの問題について道教委と連携している。今後の取組として、一つの自治体では対応しきれない場合、複数の自治体が協働する可能性もあるのではないかと推察している。

14頁、記事番号6-1-2「室蘭と登別、2市共同で給食新施設 29年度から運用」という記事について。これは、給食を運ぶ距離の問題をクリアすれば、効率的で、メリットもたくさんある話である。登別も室蘭も、給食の施設が老朽化して建て替え時期を迎えているのだが、どこの自治体も経費等の削減を行っていることや、新規に建設しても食数が少なければ効率が悪いことなどが課題となっている。今回は、登別市と室蘭市の思いが一致したことになるのだが、このような事例は他にもあると感じている。

続いて17ページ、記事番号8-2「中学教員、イラストを無断で学校HPに 市が作者に270,000円賠償へ」の記事について。

愛媛県今治市は29日、市内の中学教員が作者の許諾を得ないままイラストを学校ホームページで使用したとして、作者のイラストレーターに賠償金として275,000円を支払うことで合意したと発表した。自治体などがネット上のイラストを無断でコピーし、使用料を求められるケースは近年各地で相次いでいる。9月の教育情報でも伝えたが、同様の記事が掲載されていた。どこでも起きうることなので、職員への指導も改めて必要であることを感じる。

19頁、記事番号9-1「文科省が黙食不要宣言」の記事について。今現在、コロナ感染者数が頭打ちになってきたという情報はありながらも、学級閉鎖は数多くの学校で起きている。このタイミングでこの報道は、困惑した方もいるかと思う。「席配置の工夫や適切な換気等の措置を講じた上で、給食の時間において、児童生徒等の間で会話を行うことは可能」とあるが、適切という表現一つとっても、人によって差が出ることである。教師の指導力は一律ではないことを考えると、混乱が起きないことを願う次第である。

最後に23頁、記事番号10-7「子どもたちがうるさいと長年苦情、利用者消えた公園廃止へ…近隣1

軒が利用5人程度に要望」という記事について。背景が分からないので、安易なコメントをすべきではないと思うが、様々な疑問を感じた内容であった。

他の記事については時間があるときにお読みいただきたい。

(3) 会務報告・各部の活動について

① 会務報告……………森田 智也 事務局長

次第に、第3回理事研修会から本日までの会務について掲載している。この間、道小研究旭川大会が開催され、コロナ禍の中ではあったが、オンラインを駆使して分科会の充実を図ることができた。この後、玉井指名理事より報告していただくが、旭川地区の実行委員会の皆様はじめ、協力いただいた会員の皆様に感謝申し上げます。

全連小島根大会は、島根と東京を結んでのハイブリッド開催となった。この後、参加報告がある。全連小の各会議も予定どおり開催された。地教研は、地区の状況によって開催方法は様々であったが、会員の研修を深める機会となった。以上、会務日誌の報告とさせていただきます。

② 各部の活動について

【経営部】……………谷口 光伸 経営部長

まず、本年度の「地区別教育経営研究会」について報告させていただく。7月27日の宗谷地区から始まり11月18日の札幌地区中学校を最後に、全ての地区が終了した。開催された地区からは、コロナ禍の中で開催方法を工夫し、教育の今日的課題を中心に「校長の職能向上」に向けた有意義な研究会となったという報告を受けている。各地区の担当の皆様改めて感謝申し上げます。

各地区に出向いた道小・道中事務局幹事が中心となり報告書を作成し、まとめたものが次の頁からの「令和4年度地区別教育経営研究会（概要）一覧」である。なお、地区の担当の校長先生をお願いした「地区別教育研究会のまとめ」については、先日、道小ホームページに掲載したのでご覧いただきたい。

2点目は「法制研究集録第53集」について。道中が担当し、現在、原稿を校正中。今年度もデータ化してホームページに掲載する予定である。来年2月の完成に向け編集作業を進めている。

3点目は「経営部本年度の活動報告」と「令和5年度の経営部の活動計画案作成」について。本日午後に行われる経営部会で今年度の反省を行う。「学校経営の資料」作成について。経営部内で次年度の内容にかかわるアンケートを実施。参考までに資料として載せたのでご覧いただきたい。来年2月の第5回理事研修会で提案する予定である。

【研修部】……………若林 晋 研修部長

前回の理事研修会以降の活動について5点報告させていただきます。

1点目は、「第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会」について。9月9日に行われた本大会は、

会同とオンラインによるハイブリッド形式で開催された。多くの参加者から、分科会が実施できたことに対し、たくさんの称賛の声をいただいた。旭川大会実行委員会の石前委員長、玉井事務局長をはじめ、旭川市小学校長会の皆様方の成功へ導く熱意と尽力に、改めて感謝と敬意を表する次第である。また、様々な形で協力をいただいた理事の皆様にも、この場を借りてお礼申し上げます。

旭川大会における「研究のまとめ」については、後程、報告させていただく。また、研究集録である「小学校教育第59号」についても、皆様の協力により先日完成し、それぞれの地区に発送しているところである。地区の会員の皆様への配付について協力をお願い申し上げます。

2点目は、次年度開催予定となっている、第66回北海道小学校長会教育研究渡島・北斗大会について。大会の概要等については、この後の協議の中で、西田研究指名理事より説明をしていただく。今後、渡島・北斗大会実行委員会の皆様と連携を図りながら、大会の成功に向け業務を進めてまいりたい。

3点目は、全連小島根大会について。今年度は、島根会場と東京会場という2つの会場をオンラインで結び、そこでの様子をライブ配信やオンデマンド配信するという形で行われた。その中で、小樽市立山の手小学校、日下部校長先生と、江差町立江差北小学校、関田校長先生が、地区をあげて取り組んだ研究について、それぞれの分科会で発表していただいた。改めて感謝申し上げます。

4点目は、「教育改革等に関する調査」について。3月には調査結果が全連小の「研究紀要」の冊子となって届く予定である。活用していただきたい。

最後5点目は、「地区研究活動」について。現在、各地区の原稿を集約しているところである。今後、北海道小学校長会のホームページ「地区研究活動」に掲載する。

【対策部】……………秦 直人 対策部長

対策部は今年度の活動を振り返り、次年度に向けて計画を立てているところである。その中から、次年度に向けて計画していることについて2点報告させていただきます。

1点目は、令和5年度「全道会長研修会」の共通話題について。お手元の文書「令和5年度 全道会長研修会の話題集約について」をご覧いただきたい。この研修会は、様々な教育課題が山積している中、各地区の課題を交流し、その解決に向けて話し合うことを目的として行われている。ここで話し合われる共通話題については、全道各地区の意見を伺いながら設定を行っていく。

共通話題の集約は、本日の資料の中に「返答いただく内容」という文書があるので、その様式に従い、協議したい話題を1～3項目記入し、令和5年1月27日（金）までに 対策部 児嶋副部長 までメールで返答いただきたい。なお、この様式については、近日中に道小ホームページに掲載するので、活用いただきたい。来年度の全道会長研修会は、6月9日

(金)に Web 開催で行う予定である。共通話題については、次年度の対策部が各地区の集計を基に原案を考え、事務局において最終的に決定させていただく。

2点目は、全道調査について。この調査については、様々に変化する教育情勢を見据えながら、新たな調査も範疇に入れて検討をしてきた。令和5年度は、令和4年度と同様に「広域人事に関する調査」「退職校長動向等調査」「期限付教諭配置状況調査」の三つを継続して実施する。

「広域人事に関する調査」は、これまでに課題だった部分のその後の経緯等を追うことで、実際に広域人事を経た方々が、その後戻られてどう貢献しているかを更に実証的に検証していきたい。「退職校長動向等調査」では、再任用・再就職を含め、その動向等を更に経年変化として調査していきたいと考えている。「期限付教諭配置状況調査」は、4月段階における全道各地の配置・未配置の現状を明らかにし、状況の改善につなげていくことを目的としている。

今後も全道会長研修会の共通話題の集約をはじめ、全道調査などにおいて、協力をお願いしたい。

【情報部】……………石田 正樹 情報部長

情報部の活動について、4点報告させていただく。

1点目は、会報「教育北海道」について。331号は、皆様の協力のおかげで、順調に原稿が集まってきた。執筆者の校長先生には、改めてお礼を申し上げます。ただいま、3月の発行に向けて、鋭意編集集中である。また332号は、全ての地区から執筆者決定のお知らせをいただいた。原稿依頼は令和5年3月初旬を予定している。

2点目は、「道小情報」について。「道小情報・道中だより号外」については、今年度、道中情報部が中心となって作成した。「北海道文教施策・予算策定に関する要望に対する回答」は10月7日付で発行済である。また、道教委との意見交換会・各課懇談会については、11月18日に校正を終え、12月3日付けで発行した。また、「道小情報第3号」第3回理事研修会の報告は、電子データで10月11日に発行、電子メール等で会員の皆様へ配信を行った。なお、「道小情報第4号」は、本日の第4回理事研修会の報告となる。これも電子版なので、各地区の校長先生方への周知をお願いしたい。

3点目は、道小ホームページについて。9月に開催された第3回理事研修会、道小教育研究旭川大会の概要、道小情報第3号などを掲載している。今後も、本日の理事研の概要や、地区校長会活性化支援事業の「実践レポート報告」をはじめ、皆様にご覧いただきたい内容を随時更新していくので、ご覧いただきたい。

4点目は、全連小関係について。「小学校時報」10月号には、「会員の声」のコーナーに、「持続可能な社会を築く」と題して、下川町立下川小学校の井川校長先生の論考が掲載された。また12月号には、田邊研修部副部長が「道小教育研究旭川大会の

報告概要」を、厚沢部町立厚沢部小学校の松村校長先生が、「特色ある研究校紹介」について執筆してください。

最後にお願いだが、本日の理事研修会終了後、道小情報第4号の編集作業に入る。挨拶・報告・その他等で発表原稿等をお持ちの方は、後日、電子メール等で情報部副部長まで送っていただきたい。

(4) 第65回 道小旭川大会について

……………玉井 一行 指名理事



道小旭川大会は本年9月9日(金)に、会同参加者が107名、オンライン参加者が433名、計540名の参加によるハイブリッド開催として無事開催することができた。紺野会長をはじめ、道小役員と各地区幹事の皆様、会員の皆様には旭川大会開催にあたり、多くのご理解とご協力をいただいたことに感謝申し上げます。

2年前の10月5日、札幌で行われた道小大会運営研修会議へ出席して石狩・千歳大会からバトンを受け取ったからの2年間は、道小をはじめ関係機関・業者の皆様方の絶大なる協力をいただきながら、旭川市小学校長会の最優先業務として大会の準備を進め、大会運営を行うことができた。

9月29日に、次期開催地である渡島・北斗大会へと引継ぎを行い、大きな荷物を下ろすことができ、うれしさと少し寂しさもあるこの頃である。引継ぎ内容については、先日の会議の中で詳しく報告させていただいたので、本日は、大会アンケートの中から何点か抜粋して紹介させていただく。

- ・午前中の全体会では、今後の方向性を確認するとともに、大字会長から校長として押さえておかなければならない事項や心構えを学ばせていただいた。午後は、ICTの活用についての現状と課題、実践例を発表していただくとともに、他の地区の校長先生と取組について協議することができ、大変有意義であった。運営に携わってくださった方々に感謝申し上げます。
- ・初めてのハイブリッドによる大会運営、大変お疲れ様でした。オンラインのよさもあるが、一堂に会して協議内容以外の様々な課題についても語り合える場がほしい。自分のように校長経験が浅い参加者こそ、そのような場を望んでいるのではないだろうか。
- ・オンラインで十分協議が深まった。会場でもう少し深めたかった。情報交換したいこともあった。
- ・しっかりと学ぶことができた大会であった。ブレイクアウトルームでは、まだまだ話したい思いがあったが、あっという間に終了時間となった。
- ・コロナ禍で校長となり、まだ会同の研究会に参加したことがなく残念な思いがあった。しかし、今回のブレイクアウトルームを活用した話し合いは、それを補うに十分にであったと思っている。充実した時間を過ごすことができ、実行委員会の皆様に感謝している。
- ・会同がベストではあるが、今やれることで精一杯対応し

た今大会はとても意義あるものであった。各学校では一人の校長ではあるが、仲間の存在の大きさを感じることができた。

この場で伝えられる内容は以上となるが、改めて道小大会が、校長の職能向上として貴重な機会であること、もっと話し合いたい、深め合いたいと願う仲間の大きな存在があることを感じた。このような大会が今後も継続されることを願って、私からの報告に代えさせていただく。

(5) 第65回 道小旭川大会 研究のまとめ

……………若林 晋 研修部長



「川のまち旭川から 子どもたちの笑顔と希望の架け橋となって 未来をともに創り出そう！」をキャッチフレーズに、第65回北海道小学校長会教育研究旭川大会は、コロナウイルス感染拡大防止の観点から、会々とオンラインによるハイブリッド開催という新たな形で実施された。

大会主題「自らの未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、大会副主題「ふるさとに誇りと愛着をもちともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」の究明に向けて、11の分科会において、Zoomのブレイクアウトルームをグループ討議で活用し、たいへん熱心な研究協議が行われた。心から感謝申し上げる。

各分科会においては、これからの時代を生きる子どもたちに求められる資質・能力の育成に向けた教育課程の編成・実施・評価・改善や、危機管理対応、いじめ・不登校等の生徒指導など、今日的課題の解決に向けた指導体制確立のための校長の役割と、その具体的方策等について重点的に研究協議が行われた。それぞれの分科会における提言内容や討議内容、まとめなどを俯瞰し、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性について、次の二つの観点から整理したい。

一つ目は「地域や学校の特色を生かし、新たな時代に求められる資質・能力を育むカリキュラム・マネジメント」について。二つ目は「学校の組織力向上とこれからの担う人材育成に向けたリーダーシップ」についてである。

では、各分科会の研究協議の内容について、この二つの観点から報告させていただく。

まず、一つ目の「地域や学校の特色を生かし、新たな時代に求められる資質・能力を育むカリキュラム・マネジメント」について。

第1分科会「経営ビジョン」では、「豊かな心の育成」を実現するための経営ビジョンの在り方とそれを具現化した実践事例が報告された。9年間の学びを意識した中で、中学校区や地域でグランドデザインや重点目標を共有、統一していくこと、先見性をもって経営ビジョンを策定し発信すること、外部

機関との連携における校長の役割、子どもの姿で評価・改善し、次につなげていくことの大切さが確認された。

第4分科会「知性・創造性」では、コロナ禍における児童の学習保障に向けたカリキュラム・マネジメントの取組やリーダーシップの在り方が報告された。カリキュラム・マネジメントを学校課題解決に向けた実効性のあるものとしていくためには、教職員の意識改革と課題の共有化が重要であり、そのために小・中が連携して一貫した教育課程の改善やそれを行う組織の見直しなどに取り組むことが大切であることが確認された。

第5分科会「豊かな人間性」では、人権教育を切り口に、豊かな人間性を育む教育活動を意図的・計画的に推進するカリキュラム・マネジメントの在り方に関する研究が報告された。人権教育に計画的に取り組むためには、校長が学校経営方針に位置付けてカリキュラム作成を推進すること、人権教育を推進していくためには、校長が方向性を示し、エビデンスを得て、教職員の実践(授業)を通して検証していくという指導性を発揮していくことの大切さが確認された。

第6分科会「健やかな体」では、「心身ともに健やかな子どもの育成」に関する「十勝版経営シート」を用いた経営ビジョンの構築と校長のリーダーシップの報告がされた。「十勝版経営シート」のように、学校間や地域と連携し教育課程に生かしていく取組は、校長の思いを生かしたカリキュラム・マネジメントに向けて有効な手立てであること、地域性を生かし、価値付けや方向性を定め、協働意識を高めていくような連携を行っていくことが大切であることが確認された。

第9分科会「学校安全」では、小中一貫教育における9年間を見通した防災教育の推進や、地域ぐるみで子どもの安全を守る取組について報告された。子どもに主体的な判断、行動する力を身に付けさせるためには、校長のリーダーシップの下、教職員の判断力、行動力を高める必要があること、家庭や地域と連携した安全教育に取り組んでいる学校が少ないため、今後、校長の発信力を高めながら連携して取り組むことの大切さが確認された。

第11分科会「社会形成能力」では、昨年度からの継続研究としての課題に焦点を当て、その解決に資する地域の特色を生かしたキャリア教育の実践が紹介された。子どもたちに他者と協働しながら課題解決を図る資質・能力を身に付けさせるためには、体制づくりやシステム構築も必要であるが、子どもの姿から成果を見極めること、自己決定力を育成すること、多様性を認め合える土壌をつくることなどが大切であることが確認された。

第12分科会「自立と共生」では、共生社会の創り手を育む特別支援教育の視点を生かした学校経営の在り方や重要性について、昨年度課題であった「小中連携」に関する具体的な実践例も交えて提言された。多様な他者と協働するには、9年間で育てる資質・能力を小中で共有して取り組むこと、児童・生

徒の自己肯定感を高めることが不可欠であり、積極的に関わり発信していく力を育てていくことが重要であることが確認された。

次に、二つ目の「学校の組織力向上とこれからの担う人材育成に向けたリーダーシップ」について。

第2分科会「組織・運営」では、学校経営ビジョンの具現化のためのミドルリーダーを核とした校内組織の構築、根室地区の教育風土を生かし組織の活性化に向けた具体的な取組が報告された。活力ある学校組織を構築し学校経営ビジョンを実現するためには、グランドデザインを教職員、保護者、地域等に浸透・共有することは必須であること、心理的安全性を伴った職場環境づくりが求められていることが確認された。

第3分科会「評価・改善」では、学校評価と人事評価をリンクさせ、子どもたちのための評価・改善を目指してアプローチしてきた具体的な実践事例が紹介された。不断の改善を図るために、校長は教職員とのつながりをしっかりともち、自己有用感が高まる評価をしていくことで学校運営に対する参画意識を向上させていくこと、目指す子どもの姿と評価項目・評価基準、方策と分掌計画・学級経営案など、全てのことを教育目標の達成につなげていくことの重要性などが確認された。

第7分科会「研究・研修」では、ICTの活用による学びの質を高めるための研究・研修体制の在り方や組織的な活用の推進に向けた校長のリーダーシップについて提言があった。校長にはICTの活用が本来の目的である「個別最適な学び」「協働的な学び」に効果的に作用し、学校の教育力向上の実現につながる「チーム学校」の舵取りが委ねられていること、「学校として」「6年間で」子どもを育むぶれない教育課程をつくるために必要な研究・研修の仕組みや組織を構築することの重要性が確認された。

第13分科会「社会との連携・協働」では、コミュニティ・スクールや学校段階等間の連携の推進等に関与する教職員や関係機関への校長の適切な働きかけについて報告された。これからは、学校と地域が目指す子ども像・地域像を共有し、対等な立場で活動する協働関係が重要であり、その関係をつくる鍵となるのが学校運営協議会や地学協働本部という組織の充実にあること、0歳から18歳までの学びの道筋を整理し、それに基づいた教育実践と検証を重ねていくことで、持続可能な校種間連携が継続されていくことの大切さが確認された。

以上、11の分科会の概要について、二つの観点から述べさせていただいた。全ての分科会を通して、校長の役割と指導性について俯瞰してみると、次の2点が大切であることが見えてきた。

1点目は、地域や学校の課題へのアプローチやこれからの時代を生きる子どもたちに求められる資質・能力の育成に向けて、校長が積極的に明確なビジョンを示し、教職員や保護者、地域・関係機関とも共有し協働して取り組むことである。さらに、その結果を子どもの姿で評価・改善し、関係者と一体となって学校経営を推進していくことで、社会に開か

れた教育課程の編成につながるということがうかがえる。

2点目は、学校の組織力向上に向けて、教職員との意図的な関係づくりを図り、自己有用感が高まるような適切な評価等でモチベーションを高めることで学校運営に対する参画意識を向上させること、教職員や保護者、地域、関係機関との連携・協働を機能させるコーディネーターとしての役割が重要であることなどである。さらに、教職員を育てるための組織力を強化し協働性を高めていくことで、これからの担う人材育成を図ることも重要であり、校長の組織マネジメントが求められるということである。

子ども一人一人の能力を伸ばし、来るべき社会の担い手を育てるという思いを教職員にもたせることは、校長が示す先見性をもった学校経営ビジョンとリーダーシップに負うところが大きいと思う。コロナ禍も3年目となり、感染症対策と教育活動を両立させながら進めているが、是非、それぞれの学校がチーム力を生かして目標を達成するよう、研鑽を重ねていきたいものである。

本大会は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、全体会、分科会ともに会合とオンラインによるハイブリッド開催という形で実施された。これまでとは大きく異なる新たな開催方法ではあったが、参加していただいた皆様一人一人の協力のおかげで充実した大会とすることができた。これもひとえに、旭川市小学校長会の皆様による万全の準備と尽力のおかげである。心から感謝申し上げる。

本大会の研究の成果が、参加していただいた校長先生を通して各地区に還元され、更には各学校の学校経営の一助となることにより、「ふるさとに誇りと愛着をもちともに未来社会の創造に挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」につながっていくことを確信している。

そして、来年開催される第66回北海道小学校長会教育研究渡島・北斗大会に引き継がれ、更なる大きな成果が得られることを願い、研究のまとめとさせていただきます。

(6) 第74回 全連小島根大会報告

…… 森田 智也 事務局長

全連小島根大会について報告させていただく。

この大会は島根と東京の2地区を結んで行うという試みであるが、これこそが全連小の心を表しているのだと感じたが集って語り合うことへの価値を共有したいということではないだろうか。私も数年ぶりに分科会に参加した。久々のライブ感であった。Zoomでも意見交流はできるが、今回は会合だったので、交流タイム以外にも貴重な意見交流を行うことができた。

それでは北海道からの発表についてお伝えする。第6分科会では、小樽市立山の手小学校、日下部校長先生が、「健やかな体を育むカリキュラムマネジメントの推進における校長の役割と指導性」について発表して下さった。

小樽市の子どもの体、体力について肥満傾向にあ

ること、体力低下が著しいこと、運動量そのものが不足している状況から、資料にあるような三つの取組が紹介された。この取組は学校だけにとどまらず、地域の特徴を出しながら実践が行なわれているので、今後の取組もとても楽しみな内容であった。

第9分科会は「経験を繋ぎ実践力を高める防災教育・安全教育の推進と校長の在り方」について、江差町立江差北小学校、関田校長先生が発表してくださいました。私はこの分科会に参加したのだが、非常に納得がいく、共感を呼ぶ発表であった。

訓練の充実へ目が行きがちだが、実は、靴をそろえて入れる、持ち物を整理することが、命を守る行動として、日常で大切にされていることに、簡単だけど大切だと思ったなどの感想が寄せられていた。

交流では、東京都荒川区の校長先生からの情報で、荒川区は木造建築家屋密集地域で、レッドゾーンというお話から、2011年の震災のあと、各中学校の部活動に防災部と呼ばれるものができたという話があった。「日中、この地域にいる若者は誰?」「中学生がいる。」ということから始まった話だそう。以上、報告とさせていただきます。

(7) 令和5年度以降の研究関連分担について

……田邊 芳明 研修部副部長

令和5年度以降の研究関連分担については、令和元年度の理事研修会において提案、承認されている。現在のところ、変更を要するような事情が発生していないことから、計画のとおり、実施することになるので確認いただき、各地区での準備をよろしくお願ひ申し上げます。

なお、今後、来年度の全国大会である東京大会の次、再来年度の徳島大会の割当等によっては、変更を生じる場合があるのでご承知おき願ひたい。徳島大会の担当分科会については、年が明けてから伝えられる予定となっている。

(8) 道教委・教育局への要望内容の集約について

……森田 智也 事務局長

令和5年度の要望書作成に向け、各地区からの要望事項の報告を前回の理事研修会で皆様をお願いしていた。それを集約したものが資料の1頁から5頁に記載したものである。昨年との比較で差が大きかったものは色分けして表している。現在、令和5年度の要望書を道中が主担当となって作成中である。この間の各地区の協力に感謝申し上げます。

(9) 北海道へき地・複式教育研究連盟(へき・複連)の活動や要望について

……小野田 年克 指名理事



資料の1頁「1」と「2」に、活動の目的や活動の内容等が記載されているのでご覧いただきたい。

本道のへき地・複式教育研究の振興に寄与することを目指し、「へき地性」「小規模性」「複式形態」の三つの特性を生かした教育の充実を図る研究活動をはじめ、記載の内容に取り組んでいる。

その中でも今年度の活動の中から、特に重点を置いた全道へき地・複式教育研究大会について説明させていただきます。

1頁の「活動概要」に記載しているように、第71回全道へき地・複式教育研究大会胆振大会1Stステージを9月14日から2日間日程で開催した。コロナ禍の中でありながらも、いかに安全に、また、確実に研究の歩みを進めていくか、実行委員会を中心に大会の在り方の検討を重ねて実施している。

3年ぶりの会同参加も含めたハイブリッド型の開催であり、昨年度の第70回記念大会で実施が叶わなかった記念講演を1年越しで実現することができた。講師には現在の学習指導要領作成に大きく関わられた、文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室長の石田 有記 氏をお招きした。また、連盟加盟校の実情等も踏まえ、これまでプレ大会と本大会を2地区で同じ年に実施していた開催方法を、今回から1地区のみに焦点化し、2年間継続して研究に取り組む方式に改正した。次年度は今年の成果を全道で共有した上で、同じ胆振地区でのFinalステージへとつなげていく。

大会の様子は昨年度のオホーツク大会で取り組んだ授業などのライブ配信、ワンモア配信を継続実施し、特に授業配信は複式の特性をより分かりやすく伝えるために最大4画面とするなど、これまでの研究成果を生かしたものとすることができた。

このような配信による研修・授業スタイルは、へき地小規模校のみならず、大規模校や中学校においても活用できるため、注目されはじめている。次年度の大会では、複式小規模校以外の、より多くの学校からの参加も期待しているところである。

以上のように、この大会では会同参加の先生方が、久しぶりに授業を間近で見ると、その臨場感を味わっていただいた。また、へき地教育振興法に記載されている「より多くの教職員の研修機会の確保」という趣旨に基づき、現地で参加できなかった方にも、実際の教室に近い動画をご覧いただくことができたと思っている。

今後も道小役員の方々をはじめ、各地区の校長先生、諸先生方の支援をいただきながら、取組を進めていきたいと考えている。

(10) 北海道特別支援学級設置学校長協会(道特協)の活動や要望について

……猪股 嘉洋 指名理事



道特協からは、3点報告させていただきます。

1点目、道特協第46回 経営研究会 中空知大会

は、空知教育センターをメイン会場とし、10月28日(金)オンラインで開催された。研究紀要は、事前に作成し参加者へ郵送。どの分科会も司会の校長先生の進め方がよく、よい意見交流が行われた。

開催地区 中空知地区をはじめ、提言された宗谷地区、十勝地区、東胆振地区、釧路市地区の皆様へ、深く感謝申し上げます。

2点目、全特協及び文科省に関わることについて伝えさせていただく。今年度3月以降、国の特別支援教育に関わる動きが活性化している。3月に文科省から出された「特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議」報告では、全ての採用教員におおむね10年目までの期間において特別支援学級の担任を複数年経験すること」「中堅以降についても、校内研修、交換授業、OJTの推進、特別支援学級等の教師による特別支援学校への人事交流の充実」等に加え、校内教師間による、通常級と特別支援学級の教師間による交換授業や研究授業の実施等、採用、育成段階における方針がかなり明確に示された。

また、4月の「特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について」の通知では、交流及び共同学習の重要性、特別支援学級に在籍している児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた授業を行うこと等が示され、これまでの特別支援学級の教育課程の在り方を見直す必要性について述べている。

9月に、国連の障害者権利委員会から日本に、「インクルーシブ教育の『すべての子どもが同年齢の子どもとともに通常の学級に包含される』という理念からすると、日本は、特別支援学校、特別支援学級のように、分離しているのではないか。インクルーシブ教育に移行するための具体的な方策を示してもらいたい。」というような勧告が出されている。これは、インクルーシブ教育システム、特別支援教育、先ほど話した交流及び共同学習にも関わることなので、今後の動向を注視していきたい。

国連は日本に対して、インクルーシブ教育の更なる推進の勧告を行っている。これは、インクルーシブ教育システム、特別支援教育、交流及び共同学習にも関わることなので、今後の動向を注視していきたい。

3点目、今後のことについて。

一つ目は、8月に行われた各課懇談会でもお伝えしたが、管理職を含めた全教職員の特別支援教育への資質向上が必要であり、教職員一人一人のキャリアステージにあった目標、もっと言うと文科省がこのところ大切にしている特別支援教育に関わるキャリアパスが必要だと考えている。また、全国的に、教員育成指標に特別支援教育に関する事項を明示している任命権者が少ないということが指摘されている。

今後、特別支援教育に携わる教師の増員、全教職員の特別支援教育に関する資質向上と共に、今話した内容も含めて要望していきたいと考えている。

(11) 令和4年度 第1回運営委員研修会(中間報告)について …… 末原 恵蔵 会計理事



令和4年度北海道小学校長会一般会計、並びに特別会計の9月末日における収支について報告させていただく。時間が限られているので、要点のみ説明させていただく。

収入の部を説明させていただく。

- ・項1 会費は、各地区校長会から納入された前期分と一部後期分の合計金額となっている。
- ・項3 補助金についてだが、今年度、全連小からの助成金が増額されたため、予算より多い収入となっている。
- ・項4 借入金は、1,200万円となっているが、備考にあるように会費完納後は特別会計運営積立金へ返戻となる。1,200万円は、会費が納入されるまでの間に運転資金として最低限の必要な金額であるため、会費が完納される1月頃に運営積立金に返戻する方法をとっている。

支出の部を説明させていただく。

- 1 研究大会費について
 - ・大会運営費として3,000,000円支出している。
 - ・旅費は大会に関わる打合せや下見等で支出している。なお、大会運営研修会の支出については、開催が10月3日のため、ここでは反映されていない。
 - ・雑費は、分科会がハイブリッド開催となったため大会関係費諸経費の支出はない。この後は、全国大会準備金積立として、1会員500円の合計483,000円を支出する予定である。
- 2 研究調査費について
 - ・旅費は地教研が3年ぶりに会場で開催された地区が多くあったが、オンライン開催・ハイブリッド開催もあったことから、予算よりも少ない支出となっている。
 - ・資料用紙・作成費の執行は現在0円だが、1月頃に支出を予定している。
- 3 研究成果刊行費について
 - ・研究成果刊行費は、備考欄の強調文字が未執行分となっている。
- 4 対策活動費について
 - ・平成29年度から札幌市が北海道から税源移譲されたことに伴い、対策活動に見合う経費を想定し、920,000円を札幌市小学校長会に計上している。
- 5 事務局費について
 - ・備考の種目によりほぼ予定通り支出されている。
 - ・会議費は、密を回避するためにホテルの会議室を使用する回数が増えたことなどから、予算より支出が増額している。
 - ・備品費は、オンライン会議のために必要な物品を購入する予定。
 - ・通信運搬費は、電話や郵券等の支出の他、セキュリティ環境の強化にも支出している。

- ・慶弔費の中の、退職記念品の執行は、1月に執行予定となっている。
- ・雑費は、広告料等に支出しておいた。特別会計の運営積立金への繰り入れも予定している。

次に、特別会計について。

1 運営積立金について

- ・3,000,000円の収入は、昨年度、旭川大会実行委員会に支出した大会運営費の返戻分である。
- ・支出は先ほど述べたように、4月に一般会計へ12,000,000円を運営資金として貸し出している。
- ・地区研修補助金として、今年度は2,360,000円支出している。
- ・次年度の渡島・北斗大会の運営費として3,000,000円支出している。

2 全連小基金について

- ・収入としては、繰越金と令和4年度の新会員168名による拠出金である。

3 退職積立金について

- ・事務所の職員退職金のための積立である。年度末に積み立てる予定。

4 雑収入

- ・地区校長会活性化事業①は、地区校長会20地区に各地区10,000円ずつ「研究実践交流事業」として支出している。
- ・地区校長会活性化事業②は、全連小が行っている海外教育事情視察に参加するための補助である。ここ数年、コロナ禍により事業の実施がなかったため支出がなかったが、次年度は実施する予定との連絡を受けている。前回の割当ては3ブロックだったので、次年度は4ブロックから参加者を選出してもらうこととなる。

5 道小基金について

- ・収入としては、繰越金と令和4年度の昇任校長の拠出金となっている。
- ・支出としては、渡島・北斗大会の準備金として500,000円となっている。

6 全国大会準備金について

- ・8年毎に巡ってくる全連小北海道大会の準備金として積み立てているものである。
- ・今年度の積立は、年度末に行う。

以上、雑駁ではあるが、一般会計並びに特別会計中間決算の報告とさせていただきます。

…… 北島 信 監査委員長



令和4年度の会計中間監査結果について報告させていただきます。令和4年10月31日、北海道小学校長会事務所において第1回運営委員研修会を開催した。末原会計理事から一般会計及び特別会計の中間決算報告を受けた後、4名の監査委員（1名欠席）で、令和4年度北海道小学校長会一般会計及び特

別会計について、会計帳簿、預金通帳、領収書綴り、残高証明書等を照らし合わせ、令和4年9月末現在における会計監査を行った。

その結果、収支について誤りなく、正確に処理されていることを認め、会計帳簿に押印した。なお、関係書類、諸帳簿書類等がよく整備されており、誤りのないことも確認した。

以上、令和4年度会計中間監査結果の報告とさせていただきます。

(12) 企画研修委員会 中間報告

…… 南部 和紀 委員長



企画研修委員会の中間報告をさせていただきます。

5月9日の総会の折に、札幌地区より提起された内容について、道小 紺野会長より諮問を受け、答申する形となっている。本委員会はこれまでに、4回の委員会を開催し議論を重ねてきた。

まず、対策活動等補助費の位置付けや会計上の運営についての検討と確認について。

これは、税源移譲の際に、札幌地区の主たる交渉の相手が、道教委から札幌市教育委員会に変更されたことに伴い、対策活動等補助費920,000円が道小より札幌地区に支給されており、その費用の用途についての検討と確認であった。詳しくは、資料をお読みいただきたい。委員会としては、対策活動等補助費の札幌地区内での位置付け及び用途については問題ないとした。しかし、会計上の事務手続きについては、920,000円という額が総会の決議を経て支出されていることを示すために、今後も継続が必要という判断をした。

次に、道小の運営の効率化に向けた今後の具体的な取組についての意見交換を希望するという内容について。

これについては、三つの観点で意見交換を行った。今後、学校数の減少が見込まれ、会員数の減少は避けられない状況である。今後の運営については、危機感をもって対応しなければならないという前提で意見交換を進めた。

1点目、会議の精選、旅費の削減について

会議や旅費等の精選・削減については、令和2年度に開催された企画研修委員会の報告に基づき、今年度から取組が始まったばかりであるため、まずは推移を見守りつつ、見直せる部分については、今後も不断に取り組む必要があるとした。

2点目、研究大会の運営について

研究大会については、令和8年度の全連小北海道大会（札幌大会）までは、従来の内容や方法を基本として開催するのがよい。ただし、内容の一部を配信するなど、多くの会員に情報提供することにより、会員の職能向上につながると考えられるものについては、適宜、検討するのがよい。令和8年度以降に

については、道小事務局内で原案を作成した後、令和6年度を目途に、企画研修委員会で検討するのがよいとした。

3点目、将来を見据えた組織の在り方についてブロック数や地区の数、専門部の数については、道中並びに道公教と歩調を合わせる必要がある。今後の組織再編等については、道中とも、小中合同研修会等で協議を進めていくのがよい。その際、全連小、全日中の動向を注視しながら検討を進めるのがよいとした。

以上、中間報告とさせていただきます。

(13) 全連小対策・調研担当者連絡協議会 報告

…… 森田 智也 事務局長

…… 松村 隆志 事務局次長

全連小対策担当者連絡協議会の報告をさせていただきます。

この会の位置付けだが、道小が行っている会長研修会と同様のものであると認識している。ここで話し合われたことをもとに、文科省への働きかけにつながっていくものと感じている。

対策部会の今年のテーマは、「働き方改革」と「GIGA スクール構想」であった。昨年は、会長研修会や道教委との意見交換会等の情報だけで報告を作ることができたのだが、働き方改革は、情報不足であったため、全道の理事の方々に協力をいただきながら資料を作成した。北海道分については、後ほどご覧いただきたい。

全国の状況について荒川全連小対策部長がまとめてくださったので、そちらを中心にお話しさせていただきます。

働き方改革では、出退勤のシステムと校務支援ソフトがほぼ導入されていることが確認された。私が聞いた話の範囲では、北海道は出退勤システムが100%導入となっていたが、校務支援ソフトに関しては、今年中という回答やこれからという市町村が若干ある状況であった。

専科指導については、教科や数などがばらばらの実態であった。週当たりの担任の持ち時間数が、北海道は未だに多いということも実感した。全国平均を出したわけではないが、平均24~25時間ということを感じとることができた。これは全国的な傾向であると思うが、小さな市町村ほど、専科が入りにくいという実態もあるように感じた。

最も対策部長が熱く語っていたことは、専科指導と絡め、児童が下校したあと休憩時間を除けば、30~40分程度しか勤務時間が残っていない実態についてである。ここを改善していかないと、働き改革が進んだとは言えないということであった。

続いてGIGAスクール構想について。タブレットが未配というところはなかったが、周辺機器やWi-Fi、支援員などについては格差があった。

オンライン授業は、まだ授業というレベルにはなく、主体的、協働的で深い学びには向かって行きにくいという話がたくさんあった。授業となると、やはり評価ができるということが前提となるというこ

とも話題となった。同時に、ICTに対するスキルは確実に上がってきていることが認められるという話もたくさんあり、納得できる内容であった。

また、調研担当者連絡協議会においては、「教員の資質向上に向けた取組」と「学習指導要領全面実施3年目に係る取組状況と課題」について協議した。

5 協 議

(1) 道小大会運営研修会（反省会・引継会）

① 道小大会運営研修会（反省会・引継会）報告 ……田邊 芳明 研修部副部長

10月3日、大会運営研修会を開催し、旭川大会の反省と、渡島・北斗大会への引継を行った。今年度の旭川大会を改めて振り返ると、9月9日に開催された会同とオンラインによるハイブリッド開催となった全体会では、全道各地あわせて540名の方の参加があった。また、11の会場に分かれて行われた分科会では、全体協議やZoomのブレイクアウトルームを使ったグループ討議を、ハイブリッド形式で行うことができた。

多くの参加者からは、旭川大会実行委員の皆様のご尽力によって、今できる最大限の取組を進めることができた価値のある大会であったとの評価をいただいた。一方で、オンラインの活用は有効であったが、やはり、直接会って討議がしたいといった、会同を望む声が多いへん多いことを確認できた大会でもあった。

次年度も感染症対策を講じた大会運営が必要となると思われるが、そのような中でも、可能な限り従来開催してきた内容に近づけていきたいと考えている。

研修部の資料6頁~23頁にかけて、旭川大会の反省と大会運営研修会の記録を載せているので、後ほど確認していただきたい。

この後、旭川大会について、理事の皆様から感想や意見を聞かせいただくので、次年度に生かしていきたいと考えている。

② 第65回道小旭川大会を振り返って

……割石 隆浩 研修部幹事

すべての理事の皆様から話を伺いたいところだが、今回は旭川大会の第3分科会と第2分科会より2名の理事の方にお話をさせていただく。

【第3分科会】……倉本 格克 旭川地区理事

第3分科会「評価・改善」について報告させていただきます。大会当日は、オンラインのトラブルが発生しないことを願って運営を行い、オンラインホスト、サブホスト、司会者の緻密な連携と万全の準備により、大きな混乱なく分科会を終えることができた。参加いただいた皆様の協力に感謝申し上げます。

さて、本日は分科会の報告を感想も交えながら発表させていただきます。

第3分科会の研究課題は、「学校教育の充実を図るための評価・改善の推進と校長の在り方」である。本分科会の趣旨説明は、東川町立東川小学校の南部

校長先生が行った。分かりやすい資料提示と明快な説明により、研究発表の方向性と意図が明確になった。引き続き、富良野市立布部小中学校の田畑校長先生より、「子どもたちのための学校評価・人事評価を目指して」と題し、富良野市校長会の取組について研究発表が行われた。富良野市の11校では学校規模や地域の特性を生かし学校経営を推進している様子が紹介された。

市内すべての学校で、「評価活動に関わる可視化」を行うとともに「客観的な評価を目指すこと」、各教職員がその取組状況を評価シートに反映させ、校長による適切な評価により、自己有用感を向上させ資質向上を図ること。さらに、定量的・定性的の両面から働き方改革に向き合い、同僚性を発揮しながら校内の働き方改革を進めようとする前向きな風土を醸成することが重要であることが発表された。

「すべては子どもたちのために」を合い言葉とし、校長がリーダーシップを発揮しながら学校改善を推進している様子が伝わってきた。ブレイクアウトルームでのグループ協議を回っていると、研究発表の視点に基づき、積極的な意見交換がなされていることを強く感じた。

これは趣旨説明と研究発表の内容に整合性がとれていたことに起因していると感じている。今回の提言を受けて、「教職員の参画意識をより一層高めていきたい」「年度途中であっても改善できることは改善していきたい」「教職員の意欲を高めるためにも可視化、分かりやすさ、客観性の視点は有効である」など、大会を通して取組のすばらしさを共有できたことは大きな成果であったと言える。

【第11分科会】……………戸澤 法史 空知地区理事

第11分科会「社会形成能力」について報告させていただきます。

研究課題は、「社会形成能力を育む教育活動の推進と校長の在り方」である。研究発表は、空知地区の岩見沢市立北村小学校、野田校長先生より「将来の夢と希望の実現に向け、社会とつながるキャリア教育の推進」について研究発表が行われた。

内容は、アンケートをもとにした空知管内のキャリア教育推進状況から「組織運営体制の整備」や「持続可能なシステム構築」「取組の情報発信」の3点に課題を絞り、各学校の実践事例を紹介し、成果と課題を明らかにしたものであった。

その後の全体協議では、「PTCA（CSとPTAを統合した組織）の取組」や「学校ホームページの取扱い」「地域コーディネーターの取組などがとても参考になった」など、多くの声を聞くことができた。また、多くの学校が掲げる課題として、義務教育学校や小中一貫教育が進む中での地域との連携や地域コーディネーターと学校との連携に苦勞している点が挙げられた。

本分科会の成果としては、一つ目に、地域住民等と目標やビジョンを共有し、コミュニティ・スクール等を活用した組織体制整備を行うこと、持続可能な組織体制整備を構築すること、そのために、校長

がリーダーシップを発揮して推進することが確認された。二つ目に、学校経営方針にキャリア教育の視点を位置付けた上で、キャリアパスポート等の取組を含めた年間指導計画を作成すること、学校と地域を結ぶコーディネーターの役割がこれからの社会の創造に貢献する力を育むキャリア教育につながることなどが確認された。

課題としては、地域社会における人間関係が希薄化化する中、ウイズコロナを見据え、家庭や地域の理解を得ながら持続可能な連携・協働体制を構築していく難しさが共有された。また、社会形成能力を育む教育活動を推進するにあたって、小中連携の視点、教職員の思いと地域の思いを一致させる難しさ、体験活動と働き方改革の関連が課題として確認された。

今回は初めてのハイブリッド開催となり、旭川市の校長先生方の準備から当日の運営等、とても多くの困難や苦勞があったことと推察している。しかし、そのお陰で素晴らしい大会となった。この場をお借りして、感謝申し上げる。また、提言をしてくださった野田校長先生をはじめ、運営をしてくださった校長先生方、そして、熱心に討議していただいた校長先生方に感謝申し上げます。

来年は、小さな画面越しではなく、直接お目にかかり、より深く協議できることを願い、発表を終わらせていただく。

(2)全第66回道小教育研究渡島・北斗大会について ……田邊 芳明 研修部副部長



まず、北海道小学校長会教育研究大会に対する基本的な考え方について説明させていただきます。研修部資料24頁をご覧ください。

教育研究大会は「校長の職能向上」と「本道教育の振興」を目的とした道小研究・研修活動の中核を担うものである。その研究大会は、北海道小学校長会が主催し、開催地区は、5ブロックが持ち回りとし、大会運営は主管する地区校長会が行う。

本資料の5番から10番には、副主題とその趣旨、大会主題・研究課題の趣旨等の作成と決定について、大会テーマの作成・決定について、分科会の研究発表・協議・運営についてなどの手順が記載されている。また、大会参加期待数の割合など、基本的な考え方も記載されているので確認していただきたい。

これまで北海道小学校長会では、「分科会の充実こそが最大のおもてなし」を合言葉に、参画型・視覚型の分科会運営の工夫により討議の活性化を図ってきた。次年度、新型コロナウイルス感染症の影響がどこまで出るか予測は困難であるが、研修の充実を図るため、道小事務局と現地実行委員会が十分に連携をとりながら大会の準備を進めていきたい。

そこで分科会の充実に関わって、1点お願い申し

上げる。各分科会の研究発表の充実を図るためには、令和5年度5月に開催する「第1回分科会運営者研修会」から実質的な動きができるような体制が必要となる。そこで、各地区におかれては、研究発表者について、可能な限り早めに候補者を決めていただき、研究発表の準備に取り組むことができるよう、協力をお願い申し上げます。

続いて、渡島・北斗大会の概要等について、西田研究指名理事から説明をしていただく。

…西田 浩人 研究指名理事



渡島小中学校長会では「北斗大会」の開催に向け、令和4年5月に準備委員会を立ち上げ、旭川大会の引き継ぎを受けた10月からは渡島・北斗大会実行委員会として準備を進めているところである。

本日は、研究大会の概要と進捗状況について説明させていただく。協議のほど、よろしく願い申し上げます。では、研修部資料24頁をご覧ください。

渡島・北斗大会の1次案内のもとになるものである。大会のキャッチフレーズ及びシンボルマークを設定していない。北斗大会でキャッチフレーズやシンボルマークを設けないことにした理由は、開催地は北斗市であるが渡島全体で大会運営にあたることから、納得のいくキャッチフレーズを決定するまでに相当の時間を費やすこと、ウイズコロナを意識しコンパクトでスリムな大会運営を目指していること、などがある。

コンパクトでありながらも道小役員・道小研修部の皆様をはじめ、全道から参集される会員の皆様のご理解とご協力をいただき、インパクトのある北斗大会にしたいと考え、準備を進めているところである。

今年度の第65回旭川大会は、参集開催の準備を万全に進めながら、目前にして感染拡大により1日日程のハイブリッド開催となった。来年度の北斗大会では2日間日程の参集開催を前提に、リモート機能を部分的に活用する大会にできないだろうかと考えている。

記念講演については、講師に卓球東京五輪代表で金メダリストの水谷隼選手の母、水谷万記子氏をお招きする。現時点では演題は未定だが、水谷選手の少年時代からのエピソードを交え、母として、卓球の指導者として、我が子とどのように関わってきたのか、才能を開花させるために大切にしたことや、金メダリストの母親が学校教育に期待することなど、多岐に渡って存分に語っていただきたいと考えている。

全体会場は、いさりび鉄道「清川口駅」から徒歩2分程度の「北斗市総合文化センターかなでーる」としている。平成25年度第58回道小渡島大会でも全体会場として利用した施設であるが、函館市から

のアクセスは、いさりび鉄道や路線バスしかないため、函館駅前からのシャトルバスを運行する予定である。新幹線函館北斗駅周辺のホテルに宿泊される方も多いと思うので、函館北斗駅前からのシャトルバスを計画している。全体会場となる総合文化センターには大型の駐車場があるので、役員をはじめ、出席される会員の皆様も駐車可能である。自家用車でも安心してお越しいただけると考えている。

北斗市には、分科会の会場を用意できるホテルがないため、9会場11分科会は、すべて公共の施設を利用する。全体会場とは違って、各分科会の会場には駐車場が完備されていない会場があるため、移動は全てシャトルバスの利用とさせていただく。また、11の分科会会場では土足が認められていない会場があるなど、不便をおかけすることも予想される。ご理解とご協力をお願い申し上げます。

また、渡島・北斗大会でも感染症への対応が必要になると考え、準備を進めている。受付時の検温や消毒はもとより、全体会では一定の距離をとる座席配置を検討している。シャトルバスでは相席になるなど密になることも心配されるが、バス業者と協議し換気を徹底していきたい。何より感染の拡大が収まることを皆様と共に願いながら、渡島・北斗大会の準備を進めてまいりたい。令和5年9月に全道の皆様とお会いできることを楽しみにしている。

以上で開催地からの説明を終わらせていただく。よろしく願い申し上げます。

(3)道小渡島・北斗大会及び第75回全連小東京大会の参加割当等 ……田邊 芳明 研修部副部長

まず、第66回道小渡島・北斗大会への参加期待数について説明させていただく。令和5年度の会員数については現在調査中なので、令和4年度の会員数に基づき割り当てている。開催地区の渡島地区は100%、同じ第3ブロックの函館、檜山地区は70%、その他の地区は50%の割合として算出することを基本としている。そのまま計算すると、参加者は全体で512名ほどとなる。

しかし、来年度の渡島・北斗大会で予定している分科会場は、感染防止措置を施しての収容人数が、現在のところ470名程度と試算している。そこで、開催地区及び、同じ第3ブロックの割り当て数はそのままにして、それ以外の地区の割り当て数を、計算して出した人数からからおよそ1割程度差し引くことで、超過する42名分を相殺することができたので、その数を「割当数」として示している。

なお、発表者がいる分科会は、3名以上となるように配置した。また、令和6年度に発表が当たっているところは、若干ではあるが多めに配置した。

今回の資料は、令和5年度の会員数が明らかになるまでの暫定資料として確認いただきたい。なお、令和5年度の会員数は若干減少する見込みである。最終的な割当については、来年2月に開催される第5回理事研修会で改めて示させていただく予定である。感染症の状況等によっては、割当が変更となる場合もあることも了承願いたい。また、「渡島・北

斗大会分科会一覧」については、全国大会の動向を踏まえて検討しているが、今年度と大きな変更はないことを承知おき願いたい。

次に、第75回全連小研究協議会東京大会について説明させていただく。日時は令和5年10月19日、20日、全体会場は東京国際フォーラム、分科会場は東京都心の複数のカンファレンスセンターを中心に開催される。

分科会は、13分科会で構成されており、北海道からの発表は、空知地区が第1分科会「経営ビジョン」の視点①を担当、留萌地区が第7分科会「研究・研修」の視点①を担当することとなっている。2つの地区の皆様、よろしくごお願い申し上げます。

東京大会の参加期待数について、東京大会実行委員会から割り当てられた数は今年度の島根大会の2倍近い97名となっている。この数は、従来の割当に戻して算出した数となっているため、それに従い、各地区においても従来通りの10%の人数で割り当てさせていただいた。

東京大会で発表が当たっている空知地区、留萌地区については、担当する分科会において発表者のみとならないよう3名体制を確保している。また、札幌は参加人数の内数となる役員が多いことから、従来通りの21名としている。そのような関係で、他地区の割当数を若干調整させていただいたことを了承願いたい。

各地区の参加期待数を確認いただき、準備をお願い申し上げます。

(4) 次年度活動計画・総会宣言文の作成について
…… 森田 智也 事務局長

令和5年度の活動計画作成委員会と総会宣言文の作成について説明させていただく。

令和5年度の活動計画については、理事研修会の中に活動計画作成委員会が設置される。この委員会は、各部から理事が1名、事務局からは渡邊事務局次長以下、表にあるメンバーで進められる。作成委員会は、2月13日に行われる予定である。

機関討議においては、第5回理事研修会で討議され、新年度の総会にて提案、決定という運びになる。この後、会長より委員が委嘱される。

続いて令和5年度の総会宣言文案の作成について説明させていただく。次年度の総会出席代議員の中から、各ブロック1名の委員を選出し、その委員会において宣言文案を作成する。委員の選出のブロック内調整は、第5回理事研修会で行う。道小事務局からは丹野幹事と下山幹事が担当する予定である。

(5) 次年度役員選考について
…… 松村 隆志 事務局次長



令和5年度の役員選考について説明させていただく。北海道小学校長会の会則第6

条に「会長、事務局長は理事研修会で決定し、総会で承認を得る。副会長、監査委員、理事は総会で決定する。」となっている。

このことから、令和5年度の会長と事務局長は、次回、2月24日の第5回理事研修会において決定する運びとなる。そこで、2月24日当日の理事研修会に先立、役員選考委員会を開催する。

役員選考委員は、札幌と各ブロックからの輪番で選出していただいている。本年度は、1ブロック小樽、2ブロック旭川、3ブロック渡島、4ブロック空知、5ブロック釧路になる。従って、札幌・村元理事、小樽・若林理事、旭川・倉本理事、渡島・西田理事、空知・戸澤理事、釧路・齋藤理事の、6名の理事の皆様は役員選考委員をお願い申し上げます。

事務局担当は、事務局次長の松村となることも、併せてお願い申し上げます。

(6) 活動計画作成委員・基金管理運営委員 委嘱
…… 紺野 高裕 会長

6 議長退任

7 連絡

- (1) 第5回理事研修会について
- (2) 次年度諸会議年間計画(案)
- (3) 退職会員の感謝状及び記念品について
- (4) 次年度全道会長研修会の話題集約について

8 閉会の言葉……伊賀 真美 副会長



長時間にわたる審議および研修に感謝申し上げます。雪の少ないここ帯広市では、積雪がほとんどない状態で師走を迎えているが、広い北海道、今日も大雪や暴風を心配しながら参加していただいた地域もあることと思う。

さて、道小の活動も、本日、各部の中間報告や旭川大会のまとめを受け、次年度を見通すことができた。先日、森田事務局長から送付された次期教育振興基本計画のたたき台からは、教育を通して子どもたちの幸福感や自己肯定感を高めることが、これからの学校に求められていることを感じた。また、生徒指導提要では子どもの権利が大きくクローズアップされていた。本日の理事研修会で審議した一つ一つが「北海道に生きる子どもの幸せ」につながっていくことを確信しながら、参加させていただいたところである。

今年の冬至は12月22日で、一週間後となる。冬の本番はこれからであるが、この日から日が長くなると思うと明るい気持ちとなる。春遠からじである。皆様のこの1年の活躍に感謝し、新しい年に思いを馳せながら、第4回理事研修会の閉会の言葉とさせていただきます。